
カオス・クロニクル

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【Nコード】

N3140Z

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

MMOの黎明期はどうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあった。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが会う。

＊MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

押し切れなかったEnter

一瞬の迷いが命取りになる。たった一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善を尽くす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体軀をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでのオレの役目。

目の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロいねーちゃんがマリABEL。大男がパックス。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パッくんが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パッくんは笑う。シュレインのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリABELが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリABELの足元に六芒星の魔法陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となって大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持っているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリABELと同様の六芒星の魔法陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシュレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シュレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シュレンの掛け声で士気があがった。パッくんもマリアベルも、やる気をたぎらせている。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シュレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まった。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ、またよろしく」

「おつですー」

「おちゅ へへ」

オレ以外のメンバーはそういい残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行った。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇^{ためら}った。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはまるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分だが。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。Back Spaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれっきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもつと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になった。

出会いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しすぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2、3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になった事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかった。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかった。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延^{はびこ}り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になって、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

った。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。ご苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「どもっすー。今ヒマしてません？ よかったら悪魔の森にでも行きませんか??」

「」どうも。他のパーティーに誘われちゃったんでまた今度お願いします」

「りよーかいへへ」

ご苦勞な連中からたくさんのおいす……プレイヤー間同士で会話するおいすパーモードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断って、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で開くべきじゃなかったな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPポーションが切れていたので買出しにいくことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかった。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまでの道のりで、他のプレイヤーとすれ違う事はなかった。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。このあたりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、目的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界にようやく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いやすいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んでおくようにしている。他にも何か切らしている物はあったかな？とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそうになった。恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？それらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねっている。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろうか？それとも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立った時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイヤーは戦闘不能になったらしい。

いったいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思う。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した^{ホムンクルス}人造人間だ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこの果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまいが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あってもなくても同じ0に等しい防御力と、一撃食らえば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者か、よっぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの目の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらいはかけてやろう。久しくお目にかかっていないフェイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれないな。

しかし、30秒立っても、1分立っても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思って、その場を離れかけたときだ。

「おんがいsmすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からない、初めて耳にする……いや、初めて目にした言語だった。SMとか言ってるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだったらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フェイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこいつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイブナイト

「助かりましたあ^^w」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゃっきゃと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。……punpun321という名前だ。なんだこりゃ？　punpunさんにーいち？　マジでキレル3秒前とかいう意味か？

「punpun321でくす^^v　punpunって読んでくださいね☆」

punpunはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかったなんて」

「punpunはネタ師じゃありませんよぉ；；；　頑張ってレベルを上げていたのです！　そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄ってきてちゃって……」

どうやら、無闇にMOBの群れに突っ込んだ挙句、大量にリンクさせてしまったらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！　蘇生ありがとうございます^^」

プンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。プンのシルバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スキルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

プンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになって、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったプンが、さっきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去ってしまったてもよかったのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こつても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶うっとうしい。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「プンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくん^^！」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイトスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとってもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向けさせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どこのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかにせん数が少ない。敵のターゲットを集めるという事は、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならローブを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまう。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使用できるのだが……そこまでマゾな奴はそうそういない。

こいつは、何でこんなマゾいを選んだだろう……ふとプンを見

ると、いつの間にかMOBの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さっきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

「いや~~~~~~~~>< 助けて、エルくん;;」

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まったプンはボコスカMOBに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさっきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそう。

初心者に関わるとロクな事がないのは、オレ自身がよく知っているはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知っただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「プン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問いかける。

プンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、こちらに振り向いた。

「入ってるよー^^ これがプンの所属しているギルド『灰色の狼』

のギルドマントなのだ＞＜ どうだ、マイツタか@@W」

背中をこちらに向けて、プンはそう言った。

その小さな背中にくっ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、エリアボス討伐を独占していたり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人ニート共がほとんどだ。さっき組んだパツクンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「プン、それならギルメンに声掛けて育成手伝ってもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝ってもらったほうがすぐに転職もできるぞ？」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があったわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、プンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもったいぶってみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとJキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、プンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われた><; ギルメンなのに助けてくれないよーどうしよう、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけしといて、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くやっってくださいねー。とか言っただけとかれる。周りにすぐに溶け込めるような方がいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所はない。

孤独なのだ……プンは。

狩り場に行っても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろう。

かわいいそうと言えはかわいそうだが……。ボランティアで友達ごっこなんてオレはごめんだ。

「ねえ、エルくん？」

プンがオレに疑問形で何かを問いかける。解っている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出る前に。

プンよりも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて！ プンがんばって狩りうまくなるから^^」

オレの言葉よりも早く、プンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなって、Enterを押されるのを今か今かと待っている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をプンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「ありがとうございますあ」

能天気そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一步外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセツトなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し込められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息について『片付けろ』とうるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の塀にそって外に向かう。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせている。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフェイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わったか？」

「うん、エルくんのおかげだよ！　ありがとう>|<」

ブンがオレに近寄ってきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも15になったから、違う村に行けるね、やったー^^v」

「そうか、15になったか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知ってる」

「ほんと@@　お世話になります、師匠m（　　）mペコリ」

ようやくナイトらしくなったブン（装備だけだが）を背中に、ハリの村が出る。

目指す先は、ミロンの村……近くにゴブリン前線基地という、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこいつのレベルを上げる。

「ブン。ちょこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛けるぞ」

「ひゃあ、助けて@@!」

言う前にすでにプンは何匹かのウェアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で叩きのめし、静かにさせた。

「うわあ、エルくん強い!」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル1のウェアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」
小学生の時、二つ年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういえば。

「電気あんま (?!?)」

プンが頭を疑問符でいっぱいになっている。

「なにそれ、楽しいの? プンにもやってみて、エルくん^^」

「ぐぐってみろ。その上でやってほしいというなら、オレの奥義を見せてやろう」

「うわあーい^^」

プンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウェアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。
そうなれば、用済みだ。

オレはプンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは
師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩
恵がある。

二人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以
上は1・2倍。40未満は2倍になる。

さらに、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、
40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器
が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……プンのような問題児を抱え
る気にはとてもなれない。

プンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き
合って、あとは狩り友を作らせて勝手に40になってくれればいい。

オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか
別のキャラでプレイして、プンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。プンの奇行に振り回されるのも、プンのお世話
係をするのも、今だけの……。

「っておい、プン！ どこ行った!？」

気が付けば、プンの姿はどこにもなかった。ゲームから落ちたか？

「ここだよおお；；」

どこからともなく、プンの泣きそうな声（本日6度目）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくプンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本日23回目）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（へーへ＊）」

何がてへ（へーへ＊）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

プンのHPは川に落下した時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になって、ミロンの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になったばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

さっさと40レベルになってオレから卒業してくれ、プン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぱい取ってくるね、獲りたてはきつとおいしいよへqへじゅるり』などと言って、犬掻きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになっていた。

リターンを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並ぶ、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよ！ お肉ばかり食べてたらダメなんだゾ！ ぶんぶん><」

「お前はアホか」

プンがぶんぶん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩ったところで手に入るのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよ！ プンだもん><」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあったな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いで……一緒に泳いだことが縁で狩り友になって……色んな所に行ってバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまっただけで、ザコモBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴ったら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

プンもそうなのか。今のプンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとっては……ヒマな時間を潰す、ゴミ箱みたいな所なのに……。

プンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思っているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言っても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平気な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達ごっここの果てにあるのは、残酷な結果だけ。

プンにもそれを教えてやらなければならない。実際、プンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

ブンなら、解るはずだ。

「って、またか！ どこ行った、ブン！」

「ここおとおお；；」

なんと、すぐ真横からプンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。

プンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生え出てきた。

「うわああああ！？」

「壁にめり込んだじゃった、もうお嫁にいけない、つー；ぐすん」

移動不可状態になって、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、プンを救出すると、村長からクエスト『ゴ布林討伐』を受けさせ、当初の目的地、ゴ布林前線基地へと向かう。

村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。

テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突っ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。

彼女の前に立つと、プンにゴブリン前線基地へのレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で目の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだった村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言っても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆っているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもそう高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいえ、ここをナメてかかると痛い目に合う。このMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまったら……その時は終わりだと思ったほうがいい。

数匹のエリートゴブリンを引き連れて戻ってくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコモBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フェイブのプンではまず詰むだろう。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてプンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ローブ装備のオレでも十分に耐えられる。

その隙にプンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやっている暇は無い。明日は月曜日。学校もあるし、0時には寝ておきたい。

「行くぞプン。オレについて来い」

「あい！ @@、 なんだかエルくん、頼もしい。もしかして、エルくんて弟さんか妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴよこぴよこ付いてくるプンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、二つ下の泣き虫な弟が一人」

「やっぱりー！ エルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^^」

「違うよ、オレは」

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「プンはねー。一人っ子なんだあ。いいな〜兄弟><」

「そうか」

「エルくんエルくん！ エルくんはどんなお仕事してるの？ プンは高校生だよ^^」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのプンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしれない。

「エルくんって落ち着いてるよね〜@@ もしかして、30代の大人だったりする！？ キャー〜〜渋い！」

「誰が30代だ！？ オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！ あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなって個人情報の一部だが開示してしまった。にしても、なかなか失礼なヤツだな、プンは。

「えー〜@@ 同い年なんだ〜エルくんってやっぱすごいんだね。プン、尊敬しちゃいます><」

どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やっぱこいつ、苦手だ。ペースを崩されるし、行動が読めない。

「……ここでもいいか」

ゴ布林前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワンランク上のゴ布林も出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周りには、6匹のゴ布林。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから20以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合うが、ダメージは一ケタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！ @@@」

プンの装備している剣が、背後からゴ布林を切り裂く。数回の斬撃を繰り返すとゴ布林は力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであつてもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウォーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかからないかもしれない。

時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思って移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを食らったときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そのプレイヤーとプンを一緒に狩らせよう。二人が狩り友になってくれれば、プンの育成をそいつに任せてしまえる。

「プン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか？」

「欲しいー><」

「なら、ちょっと行ってみよう」

プンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂いていた。

「オークだ。オークウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おおくの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだろう。

かっこよくもなければ、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールウールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はっきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「プンもオークにすればよかったのにな」

「えー嫌だよ、かわいくないもん><」

あのオークの大男がプンのようなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなら。

「フェイブでよかったな、プン」

「@@?」

オークがその場にいたゴブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかったらこの子と一緒に狩りをしませんか？」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があって、返事がきた。

「ぬを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もショボーンですよ（・ω・）」

「こっちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしないでok」

「ぬを。ほんじゃお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきました」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですお。ぼくちんのメインキャラだったラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……コロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニュータイプに覚醒できないと思います」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、コロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すごい理由があったんだね@！
npun321だよープンって読んでね^^」 pu

プンがヤマモトの前に出て、くるっと踊って見せた。

「ぬお。フェイブっ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマちゃんおもしろーい^^ よろしくね！」

またひらりと舞ったプン。ヤマモトは無言であっちにいたりこっちにいたり、プンの周りをうろちよろしていた。

「何やってんの、ヤマモト？」

「どのアングルが、一番ベストかなって、白っていいよねえ。うぷぷ。中尉もそう思わんかね？」

「^^？」

プンはヤマモトの変態行為に気付いていないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態が！ やっぱりお前はいい！ あっちいけ、しっし！」

「ぬお。変態とは失敬な！ 僕は」

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオークの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だ！」

GMコールは慎重に

ド変態と開き直ったヤマモト。むさ苦しい、暑苦しい、息苦しい。そして、今もなおプンの背後を動き回っている。ド変態の鑑のような男だ。

はつきり言って後悔している。ヘタをこくと、プン以上に厄介な存在かもしれない。

「やっぱいいや。他を当たるんでさようなら」

こういう事は、さっさとやってしまった方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。

「そんな！　ぼくちん、プンちゃんの為なら何でもやるよ！」

「そうだよ、エルくん。ヤマちゃんかわいそうだよー><」

プンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシャルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座って、『プンちゃんおパンツ鑑賞会　ハアハア』をどうどうと開催している。

「ぬを。心優しき我が女神！　あれですか！？　あなたは死なないわ、私が守るもの。でございまするか！？　ぼくちん、プンちゃんとシンクロ率1000%オーバー！　プンちゃんに向けて、ぼくちんのエントリープラグ強制射出！」

最後のは下ネタじゃないか。もう我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいブン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。ってGMさんに伝えるんだ」

「はい^^」

その後に、『もちろん冗談だ』とブンにウイスを送っておく。

「ぬお、GMコールΣ（。D。）；」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思う。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。ブンだって、解ってるはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を言って付きまとうなら——」

「エルくん、終わったよ^^」

「ん？ 何がだ？」

「GMコール^^ 目の前に変態さんがいます>< 私襲われそうで怖いです；； 捕まえてください！ ってGMさんにメッセージ送っておいたの」

「……」

「ガクブル（（。D。））」

「プン、やればできる子なんだよ。いえーい^^v」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだ！ そもそも、冗談だってウイス送っておいたろうが！」

「えー……；； あ、ほんとだあ、気付かなかった。あはO（≧≡▽≡）O」

あはO（≧≡▽≡）Oじゃねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行った。まさか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してGMに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるって……」

「え！ ヤマちゃん……ご冥福を祈ります（>人<）」

祈るな。

しかし、また突然ごつい緑の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかあああつつ！ なんか回線の調子悪いみたいだったけど、直った！」

回線が切れて落ちただけだったか……。

「おかえりヤマちゃん^^ノ プンいっぱい心配しちゃったよお」

さっきまでご冥福を祈っていたお前はどこにいった。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あっちで一緒に狩ろう。
オレがM O B引いてくるからプンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なプンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日だけは我慢してやる。今日だけは。

それからさっきまで、プンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、ヤマモトを加えて再開する。

プンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありったけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こういう時は助かる。

オレがM O Bを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。オレがM O Bを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ20分は繰り返した。

その成果で、プンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも25になった。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。プンと違い初心者ではないので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使うタイミングが絶妙だ。

このままレベルが上がっていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色んなパーティーから引つ張りだこになるだろう。

……これさえなければ。

「「「オレがガ○ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ○ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ○ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ○ダムだ！……！」」」

「「「オレが――！」」」

「うるさい」

ヤマトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいるらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙○斬！』とか、『オレのこの手が光ってうなるう』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言っていた。

何を言っているのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦ってるときのプンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言うな、オタクが」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ブン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ハアハアうるせえ！ あーもう、10分休憩！ オレ、飲み物取ってくる！」

「いてらー^^」

「あ、ぼくちんコーラでいいおー。ストロー付けといてね、あと、おいしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマトうぜえ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもう寝てしまったらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかった。

時計を見ると、すでに11時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わろう。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口含む。

やはり、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、こぼさないようにパソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。HPが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のような。離席しているのか、キャラが突っ立ったまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けるMOBはいない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切って行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

——PKだ。

PK襲来

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPVVとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動が続いている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローグで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した二振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタップ』は高いHPを誇るオークでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

……いや……落ち着け。確か持ち物の中には完全に経験値を復活させる『神秘の復活薬』があったはずだ。ポン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減った経験値は取り戻せる。

とにかく今は……ポンとヤマモトを早くログアウトさせるか、村に帰還してもらおうしかない。

「おい、ポン！ ヤマモト！ 早くログアウトしろ！」

しかし返事はない。まだ席を離れたままらしい。どうする……？

「たっだいまー／＼／」

ポンが能天気にも今帰ってきたらしい。

「あれ？ エルくん何してるの？」

「バカ！ PKされたんだよ、一旦ログアウトしろ！ もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかった^^』。そのポンのセリフが画面に表示されたのと同じ時、短い悲鳴がして、ポンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまう。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローグらしい殺し方だ。

「ヤマモト！ いるならすぐにログアウトしろ！」

しかし、ヤマモトからの返事は無い。このままでは、全滅だ。

「ぬを。何ぞこれ！？」

「PKだ。早くログアウトしろ。20分後にまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れているはずだから」

「わかった。ぼくちゃんがPKKしちゃう！ プンちゃんをこんなけしからん格好にしたPKは許せん！ ハアハア」

「やめろって！ 相手はレベル60代のダークエルフローグだぞ！ 生き残ってるのはお前だけなんだ！ 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して——」

しかし、ヤマモトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマモトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタップ』が。

しかし、スキルは失敗してしまっただけで、ヤマモトのHPは1

ミリも減っていない。ヤマトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一薙ぎ。それも軽くかわされてしまう。

斬魔が消える。とっさにヤマトは背後に振り返りデュアルスタツブの一撃に備えようとする。しかし――斬魔が姿を現したのは、ヤマトの背後。

つまり、もともとヤマトの正面に出るつもりでいたのだ。

斬魔がヤマトに攻撃を仕掛ける。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら与えない。

しかし、ヤマトはそれに耐える。まったくHPが減っていない。……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見ている。ヤマトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマトをすぐにPKしようともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！ ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマト。通常のチャットではなく、エリア一帯に響き渡る、シャウトでそう叫ぶ。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「「「オレがガ○ダムだ!!!!」」」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中したその一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww」

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそう呟く。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめろと言ったのに……。

斬魔はすぐにここを去ろうとはせず、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さらに、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ卷いて、周

罎を埋め尽くす。

「ここは緑のゴミ箱。あーくっさ。ゴミはゴミ箱に捨てちゃう俺様
SUGEEE」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまうだろう。

せっかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こいつらは平然と踏みにじって、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリスタートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リスタートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめるな><」

ブンだった。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻ったあと再びここに……戻ってきたのか。

「WWW」

プンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フェイブってWWW ちょWおまWWW」

斬魔は依然座ったままである、それでも攻撃が当たらない。だが、プンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんWWW しかも、灰色の狼って。これは戦争やなWWW」

斬魔はやれやれと言った感じで、起き上がると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げろプン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かって、どうしようもないんだ。だから、もうやめろ。

そして、再び姿を現した斬魔。

プンは背後を取られて――。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の青年に。

フェイブナイト。フェイブナイトの青年である。

「@@?」

プンは何が起こったか理解できず、その場に立ち尽くす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かって走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタツブを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにスキルが発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「プン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト……フェイブナイトの柁^{もみじ}だ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……」

棍 舞う

ヴァンガード。確か英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持っている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだろう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560 防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。

棍はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はつきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であったりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その柁が……目の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKなのに対して、柁はPKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に対して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが柁に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、柁の前に現れる。柁はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

柁はナイトでありながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは二人が戦っている間に、プンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもらおうと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の柁に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。柁は不意打ちに備える。しかし、5秒経っても10秒経っても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

プンの言うとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があった。
……逃げたか。

「プン、ちょっとあの人にお礼言ってくるね^^」

プンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した
柎に駆け寄った。

「助けてくださってありがとうございます」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんでね」

柎は素っ気無くそう答える。

「強いんですね、ビックリしちゃいました@@w」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん（？―？）」

「ああ、初心者の人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。カ
インさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。
俺も初心者だった頃、色々お世話になったっけ」

「へえ、その人。今はどうしてるんですか？？」

「一年前くらいに……ちょっと事件があってね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はどうしているのか……」

樫は、背中を向けこの場を去ってゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り……頑張ってください。それでは」

次の瞬間、樫の姿はそこには無かった。

「あの人、すごく強かったね@@w プンもあんな風になりたいなあ〜><」

「ぬを。プンちゃんの好意がさっきのフェブ男に向かっている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしい。目の前で樫が仇を討ってくれたこともあるのだろう。……逃がしてしまったが。

「あれれ。そういえば、エルくんって樫さんと知り合いだったの？樫さんの事、詳しくあったみたいだし@@」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知ってるさ。樫はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。」

樫が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなったんだな、樫。

目覚め↓リアル

柁が去って、数分後。日付が変わってすでに午前0時10分。オレ達は今日はもう、狩りを終えて解散することにした。

リターンを使用して、ゴブリン前線基地から一瞬でミロンの村へ。村の広場で輪になって別れの挨拶をそれぞれ告げる。

「ぬお。もう月曜か……ああああああああ！ うつだ。明日からまた仕事だ（。D。） 上司ブチ殺してええええ」

ヤマモトがうなった。社会人だったのか、こいつ。もう少し落ち着いてもらいたいものだ。

「ヤマちゃん、がんばっへっb」

「早く寝ろ」

「あゝい。そんじゃ、ポンちゃん、中尉おやすも〜」

ヤマモトの姿はすぐに消えうせ、広場に残ったのはオレとポンだけになる。

「エルくん。ありがとねー！ ポン、今日だけでレベルが9も上がったよ！」

本来ならば10上がったはずなのだが、斬魔にPKされたお陰でポンのレベルは一つ下がってしまった。

「明日もよろしくね♪」

明日……いや、今日の事か。インするわけがないだろう。お前にはヤマモトという、頼りになる狩り友ができたんだ。

これ以上オレを……振り回すな。

「オレは、今日用事があってインできない」

「じゃあ、明日だね^^!」

「明日も用事がある」

「じゃあ、明後日^^」

「明後日も用事がある」

「明々後日も用事がある」

すると、急にプンから返事がなくなった。沈黙すること3分……。そのままログアウトしてやろうかと思ったが、不意にプンが何かしゃべりだした。

「ごめんね、ちょっとギルドチャットに夢中になってた」

オレの事は無視してギルメンと仲良くおしゃべりか。

「まあ、そういうことだから、しばらく忙しくてログインできないんだ。なんだったら、ギルメンに声掛けてみるよ? きっとお前の育成手伝ってくれるって」

「無理だよ」

「は？ 無理ってことないだろう」

消極的な奴だな……。もう一言いつてやるか。しかし、オレの言葉はプンの一言で遮られる。

「だって……プンのギルド……もうないから」

「え？」

「追放されちゃった^^； プンが斬魔って人に攻撃したから、それを理由に戦争を仕掛けるっていわれたらしいの」

あの時か……。斬魔も確かにそんな事を言っていたな。

「だから、戦争を起こさないためにプンを追放するんだって。しょうがないよね。みんなに迷惑かけたくないし。プンが抜けてみんなが喜ぶんだったら、しょうがないよね」

あの斬魔がそれくらいで引き下がるとは思えないが……。これが、今の灰色の狼のやりかたか。変わったんだな。

「だからね、プン、もう一人だよ。でも、エルくんがいるから平気
^O^」

厄介な事になった。狩り友ができたとはいえ、ヤマモトは社会人だ。そうなれば、学生であるオレ達よりもインする時間は短いし、平日は夜くらいだろう。

となれば、同じ学生であるオレを頼ってくる頻度が非常に高い。ギルドすら抜けてしまったブンに、もはや知り合いというのはオレかヤマモトだけだ。

オレは一人がいいのに……。このままでは、ブンが40レベルになるのが遠ざかってしまう。他にも狩り友が必要だ。

くそ……。仕方がない。もう少し付き合ってやるか。

「ブン」

「？」

「明日の予定なんだけどな、オレの見間違いだった。明日はなんとかインできそうだ」

「やったあ≧≦≡」

ほんの少しだけ……。けどな。目下の目標は、こいつに狩り友を作ること。オレがいなくても、一人で野良のパーティーに行ったり、ソロできるだけのプレイヤースキルを身につけてもらう。

問題山積みだな……。

「じゃあ、寝るな。ブン、お前もさっさと寝ろよ、遅刻するぞ」

「おやすみ、エルくん^^」

オレは、ログアウトした。

PCの電源を落とし、ベッドの上に頭から突っ伏する。すると突然眠気が襲い掛かってきた。

……風呂は朝起きたら入ろう。

それにしても、厄介なことになったな。p u n p u n 3 2 1……リアルはどんな奴なのだろうか？

一度、顔を拝んでみたいものだ。

そんなことを考えているうちに……オレの意識は闇の中へと沈んでいった。

眠い。これは相当に眠い。昨日、夜遅くまでゲームをしすぎたせいか……。

学校の自席で、俺は何度もあくびをかみ殺した。なんとか遅刻せずに済んだものの眠気が何度も俺を襲ってくる。

季節は9月。夏休みが終わって、今だ休み気分が抜けきらないクラスメイト達は、朝から元気いっぱいである。少しその元気を分けていただきたいもんだ。

と、まどろみながらそんな事を考えていると、チャイムが鳴って担任が教室に入ってきた。

朝の挨拶と、連絡事項の確認。ホームルームも終わり去っていくのかと思いきや、唐突に教室の扉を開けて、外に向かって手招きをしている。何だろうか？

クラスメイト達は皆、扉に注目する。そして、そこから一人の女子生徒が顔を出す。

同時に、クラスの男子生徒^{ハイエナ}どもは、歓声をあげる。もちろん、俺もだが。

ゲームで例えるなら……カオス・クロニクルで例えるなら、エルフ。涼しげな眼差しと、柔らかいシルクのような肩甲骨あたりまで伸びた髪。チェリーピンクの唇から紡ぎ出されるのは、どのような声なのか。

日本人形の様な美しい顔。胸も……適度に大きい。美少女だった。

「えっと……相羽^{あいば} 真理奈^{まりな}です。親の仕事の都合でこの近くに越してきました。転校してまだ右も左も解らないので、助けていただけると嬉しいです」

転校生……相羽 真理奈。担任からの紹介と自己紹介を終えると、彼女はそよ風のように優しい歩調で歩き、指定された席へ……俺の右隣へ舞い降りた。

「よろしくね」

柔らかい微笑み。微かに漂う石鹸の香りが鼻腔をつき抜ける。まるで、夢を見ているようだった。

「あ、俺。
渡辺
翔^{しょう}。
これからよろしく」

120円の転校祝い

なんとか自分の名前を言えたが、俺は内心かなりどきどきしていた。こんなかわいい子が俺の隣にやってきた。どこぞのギャルゲーじゃあるまいし、まだ俺は夢を見ているんじゃないかとも考えてしまう。

こっそりと右へと視線を向ける。ホームルームを終えた教室は、一時間目までの僅かな間に少しでも相羽さんと仲良くなってやろうという下心丸出しの男子と、自分達のグループに引きずりこもうと画策する女子達で人口密集地となっている。

転校生というのは、それだけで話題性があるものだ。それもこんな美人じゃ、話しかけたくもなるか。だが、俺にはお隣さんというアドバンテージがある。

何も焦ることは無い。

話しかける機会なんていくらでもあるさ。そう思って、再び右へと視線を向けると……。

相羽さんの横顔を偶然視界に捉えることが出来た。

違和感。そうだ、些細なことなのだが……そこに違和感を感じる。

すぐ右には、にぎやかなクラスメイト達を絵に描いたような光景があるのに、その中心の相羽さんは楽しそうじゃない。

口は笑っているけども……目が笑っていない。

どれだけ価値があるのか解らない、ダイヤモンドのような輝きを放つキレイな瞳は、何も写していない……そんな気がした。

やがてチャイムが鳴り、クラスメイトはすぐに自分の席へと戻るため散っていく。そして、唐突に訪れた静寂。

相羽さんは緊張しているのかもしれないな。転校初日に一気にこんなに話しかけられたら、ウンザリしてしまうかもしれない。そっ
としておいてあげるのが、一番なのかも。

やがて、一時間目の授業が始まり……二時間目、三時間目、四時間目が終わって、昼休みになった。

俺は席を立ち、学食に向う。

「ナベ！ 学食？ 俺も俺も。一緒に食おうぜ」

クラスメイトの一人が俺に話しかける。そうそう、俺のあだ名はナベとか言われてる。一時俺の事をオナベとか冗談で言い出した輩がいたが、そいつにはデュアルスタップ（割り箸でだが）を決めてやった。

ナベとオナベじゃ意味が全然違うだろう。

数人のクラスメイトと一緒にじゃれ合いながら学食へと向う。適当に空いている席を見つけてそこを拠点に、半分を食券係りにして半分を拠点防衛に当たらせる。

俺と稲田というクラスメイトが席に残り、他の奴らを待つことに

なった。

「なあ、相羽ってさ、この前お前が貸してくれたエロいDVDに出演してた、AV女優に似てない？ いや……この前のエロゲーのヒロインかな？」

自称エロゲー博士。通称歩く下ネタ製造機。それがこの稲田大河という男であった。当然、クラスの女子からは嫌われている。

運動系の部活に入っているでもなく、スポーツ刈りでメガネをかけたその風貌は地味という言葉がピッタリと似合う。

「ナベはさ……もう見たの？」

「何が？」

「相羽のパンツ」

赤面しそうになる。こんな学食のど真ん中で、パンツ見たのとか、ありえない。

「見るわけねーだろ！」

見たいけどな。そんな機会があるものなら。

ちなみに、稲田は純白が好ましい。クマさんも捨てがたいらしいが……まるで健全な男子高校生の鑑の様な奴だ。もちろん見習うつもりなどないが。

……俺はしましまがイイな。

その後、稲田を放っておいて俺とクラスメイト達は昼食を済ませると、それぞれ学食で別れて昼休みの余暇を過ごすことになった。

俺は学食の隅にある自販機へと向かい、カフェオレでも買うことにした。財布の中から小銭を取り出し、一枚一枚入れる。

ボタンを押そうと手を伸ばしたとき、石鹸の香りがたちこめた。

この香りには覚えがある。そう、彼女だ。

相羽さんが隣に立っていた。彼女は一体、何を買おうとしているのか。普段なら、クラスメイトの女子が青汁を飲もうがプロテインジュースを飲もうが知ったことでは無いが、今日は特別気になった。

視線は彼女に向けていないので、気付かれていないはず。そっと、慎重に。隣に視線を移す。

不意に俺の指先に何かが触れて、ガコン。と音が鳴る。足元の取り出し口を見ると、黒い缶が吐き出されていた。

「……あ」

間違えてボタンを押してしまった。しかも……缶コーヒーのブラツクだ。

まずった。今日はブラックという気分じゃない。少し甘いカフェオレが飲みたかったのに……。

「それ、どうしたの？」

と、ふと隣から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「あ、相羽さん。いや……間違えちゃって。困ったな、俺、カフェオレ飲みたかったんだよね。もう一本買うか……」

「ちようだい」

「え？」

「私、ブラック好きなんだ。コーヒーはブラックしか飲まないから意外だった。女の子がブラック飲むのって、俺にとってはちょっと意外だ。素直に尊敬した。」

なんか、大人っていう感じだ。

「あ、うん。お金はいいよ、転校祝いにあげる！」

「ほんと？ えーと……渡辺くん？ だったよね？ 転校祝い。ありがたういただくね」

微笑んで、缶のプルタブに白い指が触れる。今、俺は思った。

——プルタブになりたい。

そして、黒い缶が……チェリーピンクの唇に……吸い寄せられ。触れる。

直後、黒い液体が俺のコーヒーが……彼女の中に進入する（この表現エロいな）。

苦さに顔をしかめるでもなく、おいしそうに飲み干す相羽さんの顔には、幸せという字が顔に書いてあるといったような満面の笑み。天使だ。

今、俺は思った。

——コーヒーになりたい。

「転校祝いごちそうさま。また教室でね、渡辺くん」

そつとゴミ箱に缶を捨てた相羽さんは、まるでテレビのリモコンの消音ボタンを押したかのように静かに音も無く去っていった。まるで、風のように。

俺はそつと願った。120円の転校祝いが、恋の始まりになりますようにと。

目標を持つことは、ステキな男性への一歩？

突如俺の願いを遮るように稲田がやってきて、目の前のゴミ箱におもむろに右手を突っ込んで黒い缶を取り出した。

「ふひひひ！ ナベ、悪いがこいつは俺がもらう。相羽の飲んだコーヒー……」

稲田は気持ち悪い笑みを浮かべながら、学食を去っていった。缶をどうする気だ。

ちゃんと言ってやるべきだったか？ 学食の自販機の横にはゴミ箱が二つある。うち片方には先ほど相羽さんが捨てた缶が入っており、もう片方には柔道部3年生の佐藤先輩……身長1.9メートル、体重0.12トン。マウンテンゴリラ佐藤の異名を持つ、彼が飲み干した缶が入っていたのだが……どんな味だったのか、後で稲田に聞いてみよう。あいつには相応しい末路だ。

学食から教室へと帰還すると、自分の席に着こうとしたら生徒の山ができていて、それは不可能となった。

相羽さんを中心とした人の渦は、楽しそうな笑い声を教室に振りまき、それに参加しなかった者は教室の片隅で暗く寂しく一人の時間を過ごしている。

邪魔だな……こいつら。だいたい、相羽さんにそんな付きまといたら迷惑だろう。彼女の気持ちも考えてあげるべきだ。

溜め息を付いて手近の空いてる席に腰を落ち着かせ、会話の内容

に耳を傾ける。

「相羽さんって彼氏とかいるの？」

早くもプライベートに突っ込んでいる奴がいるな。いいぞ。もっと聞き出せ。

「いないよ」

相羽さんは、はにかんだような声で、恥ずかしそうに答える。ついでに誰か好きな異性のタイプも聞き出してくれるとありがたい。

「じゃあじゃあ！　どんな男の子がタイプ？」

「マジメな人かなあ。しっかりと目標を持っていて、それを最後まで成し遂げる強い意志を持った人」

むむ。マジメというのは、俺にピッタリと当てはまる。目標を成し遂げる強い意志……か。

とりあえず、投げっぱなしにしていたジグソーパズルを帰ったら完成させよう。

と、そんな事を考えていたら昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴って、人の渦はバラバラと散っていった。

その後、5時間目と6時間目を終え、今日一日の授業が全て終了する。

ホームルームが終わると、相羽さんは女子数名に連行され、教室

から出て行った。カラオケに行くらしい。

俺も誘われたが、今日は用事があるので泣く泣く見送った。相羽さんの歌……聴きたかった。

何を歌うだろうか？　もしかして、アニソン？　アニソンとか歌わせたら、萌えるな。ああ、行きたい。けど、行けない。

俺は、教室から去っていった彼女の後姿の残像を目に焼き付けたまま、我が家へと帰宅した。

晩御飯を食べて自室に戻ると、オレは机の上のノートPCの電源を入れ、立ち上げる。

食後のコーヒーを机の端に置いて、カオス・クロニクルの世界へ。

IDとパスワードを打ち込み、キャラクター選択画面へと移動すると、そこには二人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

オレは、金髪の少年の隣に立っている青い髪の少年、エルトを選択する。

ローディング画面が表示され、待っている間にコーヒーを一口とする。舌の上に広がる香ばしさと、ほんのりとした苦味が脳を刺激し、意識を覚醒させる。

これが必要ならば始まらない。

やがて、ディスプレイにはミロンの村の景色が映し出され、目の前にはフェイブの少女が立ち尽くしていた。

「エルくん、遅いゝ；；」

「よう、プン。ってずっと待ってたのか？」

「うん！」

よほどヒマなんだな、こいつ。勉強とか大丈夫なんだろうか？
いや、案外これでいて頭はかなりよかったりするのかもしれない。

「さて、今日は……そうだな。お前、パーティーリーダーになってメンバーを集めてみる」

「ええ@@@」

「ええ。じゃないよ。一番早いのは、同じレベルの仲間を集めることだ。それを繰り返している内に、仲が良くなって友達になる。そうなると、その仲間と固定メンバーで狩りにいくこともあるだろう」

「でも、プン。知らない人とお話するのは苦手。。」

「じゃあいい機会だ。苦手を克服しろ。お前には明確な目標がない。いつまでもオレにぶらさがっているだけじゃダメだ。独り立ちできるだけの知識とスキルを身に付けろ。オレはお前の保護者じゃないんだからな」

ちょっとキツイ言い方になったかもしれないが、これはプンの為でもある。プンの職業はナイトだ。ナイトはソロ向きの職業じゃない。今のレベル帯ならばソロはまだなんとかできるが、高レベルの狩り場になればなるほどソロは困難になる。

だから早めにパーティーに慣れさせる必要がある。

「いいか、プン。まずメニューを開いて、そこからパーティーマッチを選ぶんだ。そしたら、パーティー作成ボタンを押して、コメントに『狩り友募集。一緒に炎の祭壇で狩りしましょうハハノ』と入力しろ」

「わ@@@ ちょっと待って><」

トロ臭い奴だな。再びコーヒーを口に含み、プンの作業が終わるのを待つ。パーティーマッチ（以下マッチ）を作ってもすぐに他のプレイヤーが来るわけでもない。

少し、このカオス・クロニクルの世界観と職業について勉強させてやらないとな。

猫耳魔法少女は？

カオス・クロニクルは、6つの種族と8つの職業の組み合わせでキャラの能力が変わる。

まずは種族。

ヒューマン。平均的な能力値を持つ初心者向けの種族で、どの職業とも相性がいい。

エルフ。攻撃力と魔力が低く打たれ弱い、回避率や攻撃速度、詠唱速度が高いので、アーチャーや、ヒーラーと相性がいい。

ダークエルフ。攻撃力と魔力はヒューマンを少し上まる程度だが、クリティカル率とクリティカル時の攻撃力が非常に高い。その分エルフよりもさらに打たれ弱い。ローグ、ウィザードと相性がいい。

オーク。全種族中最高のHPを誇り、一撃一撃の攻撃力が高い。しかし、速度に関しては全種族中最悪で、特に後衛の魔法系職業とは相性が悪い。とりわけ、ウォーリアが一番相性がいいが、ナイトという選択もある。

ドワーフ。能力はヒューマンを劣化させた感じになる。どの職業もこなせるといえば、こなせるが反面特にどの職業と相性がいいというわけでもない。しかし、ドワーフは唯一生産系のスキルを使えるという魅力がある。

フェイブ。低いHP。低い防御力。それを補って有り余る攻撃力、魔力、MP、速度、回避率。基本コンセプトは『殺られる前に殺れ』

、『攻撃は最大の防御』と言ったところか。実装当初はここまで極端なパラメーターではなかったのだが、ナナメ上行くアップデートのおかげでネタと化した。

次に職業。

ウォーリア。剣、槍、斧・鈍器、デュアルソードを使いこなす近接戦闘のエキスパート。スキルはジャンプして目標に飛び掛る『メガクラッシュ』や、大ダメージを与える『クリティカルブレード』など、多彩で派手なエフェクトのスキルが充実している。

ナイト。剣と盾を装備する。パーティーの壁。ヘイトスキルを使用して自身にターゲットを固定させたり、スキル『ファイナルプロテクション』で防御力を一時的に底上げすることができる。

ローグ。デュアルダガーを装備する。暗殺者。一撃で敵を仕留める事も可能な『デュアルスタップ』に、5秒間姿を消す『サイレントステップ』で敵を不意打ちできる。

アーチャー。弓を装備する。遠距離からちくちくと攻撃でき、視点モードを切り替える事で、ピンポイントで相手の部位を攻撃できる『スナイプ』が使える。

ウィザード。攻撃魔法を使いこなす。魔法書を装備する。地水火風の属性攻撃魔法を使いこなせるが、覚える魔法は種族によって一部異なる。例えると、ヒューマンが覚えるブレイズアローはフェイブは覚えず、代わりにダークアローを覚える。

ヒーラー。回復魔法の使い手。杖を装備。回復魔法全般と、一部だが強化魔法^{バフ}も覚える。このヒーラーの技量によってパーティーの

生存率が大きく変動する。

サマナー。召喚獣を使役する。装備は杖・魔法書。使役できる召喚獣は、狩り場に出現するMOBである。自分のレベル＋5までのMOBと召喚契約を結べるが、最大3匹までしか契約できない。使役できる召喚獣は原則一匹のみである。主人のレベルに合わせ召喚獣もレベルが上がるので、こだわりのあるプレイヤーは、ゴブリンを最大レベルまで育て、それを最高狩り場で使役するという。

エンチャンター。強化魔法（バフ）を使いこなす。装備は特に何の縛りもなく、全ての武器を装備できる。が、攻撃スキルもないし、攻撃魔法もない。しかし、自分を含めたパーティーメンバーの能力を大幅に強化する強化魔法（バフ）を使えるので、ある程度のソロは可能である。ナイト、ヒーラーに続いてパーティー狩りでは必須の職業だ。

「……こんなもんかな。わかったか、プン？」

返事がない。

「プン」

しかし、返事はない。

「ああああああ、ごめん。寝てたZZZ」

「寝落ちとは、やってくれるな」

「だって、エルくんの説明長いんだもん；O；」

「お前はアホか。これくらい頭に入れておけ。基本だ。できる前衛ってのは後衛の経験もあるし、できる後衛ってのは前衛の経験があるもんだ。互いが互いを思いやれば、それは自然に理想のパーティーの動きになる。だから、公式に載ってる全種族、全スキルのデータを頭に入れておけ」

「そんなの無理だよ；； あ、それならエルくんもヒーラー以外の職で前衛やったことあるの？？」

一瞬答えるべきか躊躇した。しかし、自分で吐いた言葉を自分で踏み潰したくない。ここで『やったことがない』なんて言ったら、できる後衛じゃないと自分で言ってしまうようなモノだ。プンにナメられるわけにはいかない。

「まあ、な」

「おおw@@w」

それ以上答えるつもりは無いので、話題を変えようとした時、いいタイミングでヤマモトがログインしてきた。

オレとプンの真後ろにヤマモトの巨体がうつすらとフェードインして、カオス・クロニクルの世界に形作られていく。

「ソロモンよ、私は帰ってきた！！」

何のセリフだか解らないが、またもシャウトでエリア一帯にヤマモトの声が響く。

「ヤマちゃんこん^^」

「ぬお。ブンちゃん、今宵も一段とハアハア」

「ハアハアハq^」

「お前らヤメロ」

ブンがヤマモトに連れられ、ハアハア言い出したので止める。それにしても、予想よりも早くヤマモトがログインしてくれたので助かった。

「いやゝとりあえず、仕事放り出して帰ってきた！ 上司が何か言っただけ無視してやったw」

……ダメな大人がここにいる。

「そんなことしてたらクビ切られるぞ。オレはよく解らないけど、再就職って難しいんだろ？ てか、それって大人としてどうなのよ？」

「てへ、中尉にほめられちった（／／▽／／）」

何を言ってもダメなようだ。それ以上何も言わないことにして、ブンの開いたパーティーマッチに再び目をやる。

「おい、ブン。パーティー希望者が来たみたいだ。えっと、すperiおる……だな。このすperiおるって奴を招待しろ」

マッチには一人のプレイヤーが顔を出していた。名前はすperiおる。職業はドワーフエンチャンター。エンチャンターか。都合がい

いな。

プンが四苦八苦しながらすperiおるを招待する。事前にオレとヤマモトもパーティーに入っていたので、4人分のHPバーが画面上に表示される。

「よろしくう」

すperiおるの発言。と、それと同時にオレ達の前方にドワーフの少女がとことこと歩いてきた。

このカオス・クロニクルにおいて、ドワーフはヒゲもじゃジジイという想像は間違いである。

ドワーフは男女とも、小学校高学年くらいの幼い少年少女である。こちらオークとは違う意味で人気が高い。特に、ドワーフ女は。

目の前に現れたドワーフの少女は、頭に猫耳を装着し、ピンク色のローブ（これまた丈が短い）、杖を装備していて魔法少女然としていた。

「ぬお。す、すperiおるたん、ハアハア」

案の定、ヤマモトのハアハアがすperiおるに炸裂する。

「かわいいー！><w すperiおるちゃん、かわいい！」

プンは、ドワーフ女を見るのが初めてなのか、近寄って抱きつくソーシャルをする。ちなみに抱きつくソーシャルは、相手側の了解を得られないとできない。

「レベル28のドワーフエンチャンターだぜい。緑のおっさん、ムサイから近寄るな。ねーちゃんエエ尻しとるのう」

「ぬを。まさか、すperiおるたんって……」

「ああ、俺、ネカマだから」

ドワーフ女の8割は中身が男だという噂があった。噂は真実らしい。

いつかあの日のように

すperiおるの中の人は男。まあ、ヘンに女言葉を使われるよりもオープンな方が、さっぱりしてていいかもしれない。

ドワーフ女、通称ドワ娘は一部に熱烈な人気があると先ほど説明したが、ドワーフ男、通称ドワ坊も人気がある。これもまた、一部に。

そのドワ娘とドワ坊だけで構成されたギルド『幼稚園』は、ドワ信者の巣窟である。待て、そういえば……幼稚園のギルドマスターの名前はスペリオルだったはず。

こいつ……スペリオルのセカンドか？

ちなみにセカンドは、二番目に作成したキャラクターという意味で、サブキャラとも言われる。

すperiおるの装備を見れば、一目でこいつが上級プレイヤーのセカンドキャラだという事が解る。

今のレベル帯で装備できる最高グレードの装備品に、アクセサリの猫耳。猫耳はけっこう高価なアイテムであるし、そもそも初心者プレイヤーはそんな所に金を使う余裕は無い。

「もしかしてあんた、スペリオルか？」

オレは思い切って聞いてみた。

「ありゃ？ なーんで俺の事知ってんの？ メインで会ったっけ？」

「いや、名前を見てなんとなく……」

本人だったらしい。これは助かる。スペリオルはこのサーバーでも屈指のウォーリアである。彼女……いや、彼か。彼のプレイスキルがあれば、オレのアシストもそんなに必要ではないかもしれない。

「んー？ プンってばかりキャラメイクいじくったなあ？ 珍しいぞ、それ」 珍

すperiおるがプンの周りをちよろちよろと動き回る。そして、プンを凝視したまま呟いた。

「うん^^ 5時間かけてこの子を産んだのです><v」

カオス・クロニクルのキャラクターメイキングは自由度が高い。鼻の高さ、位置、唇の大きさ、耳の大きさ、輪郭など……いじりだしたらキリがない。

だから、サンプルがいくつか用意されているのだが、キャラに愛着がある奴は最初ここで大いに悩むらしい。それにしても、5時間って……オレなんか、サンプルAの目つきと髪色いじっただけだぞ。

「ぬを。そうだったのか、プンちゃんハアハアの秘密はそこに！」

普通、5時間かける奴はいないと思うが……やはりプンは変わっている。

「それじゃ、早速『炎の祭壇』に向うか。おっと、その前にちよっ

と飲み物入れてくるよ」

「いてら^^」

机の端に置いてあったマグカップを手に取り、リビングへと向う。リビングのドアからは光がもれ出ていて、テレビの賑やかな音が暗い廊下に響き渡っていた。

「あら、またコーヒー？ 成長期なんだから、あんまり飲んだら体に毒よ？」

ドアを開けると、母親がテーブルで家計簿を付けていた。マグカップを右手に持つオレの姿を見て、飲みすぎないように注意をかけてくる。

「別に……あれ、お父さんは？」

「残業よ。あんたと潤の学費を稼がなくなっちゃならないんだから、頑張ってもらってるの。お母さんも来週からパートに行かないと……あんたも来年受験だから、予備校か家庭教師を付けないといけないわね。ああ、出費がかさむわ。宝くじでも当たらないかしらねー」

母親の声を背に、戸棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出し、マグカップへとそれを入れると、その上にお湯を注ぐ。白い蒸気が立ち上りそれが鼻腔を突きぬけ、コーヒーの香りが脳を刺激する。

「学校はうまくいってるの？」

「別に……」

「お母さん、心配なのよ？ 潤はたくさんお友達を連れてくるけど、あんたはいつも家でゲームばかり。成績は下がったりしてないから、やめろとは言わないけどね。友達をつくる事も大切なのよ？ 解ってるの？ まりー」

母親の話が終わる前にリビングのドアを閉めた。会話の中に出てきた潤というのは二つ年下の弟だ。

小さい頃からそうだった。父親の仕事の都合で転校を繰り返し、長い付き合いの友達が出来たことは無い。弟は正反对で、すぐに誰とでも仲良くなれる性分らしい。

確かに、現実には……リアルには友達が少ないけど、ネットには……どんなに距離が離れていても、場所が変わろうとも、何でも話せる仲のいい友達がたくさん『いた』。

そうだ。1年前までは……こんな風に打算で物を考えるズルい人間じゃなかった気がする。プンのような初心者とたくさん狩りに出かけてすぐに仲良くなって……。

でも……。

また作れるだろうか？ 新しい場所で……新しい仲間を。

脱ぎ散らかした制服と、今日の授業で使った教科書。ゴミ箱をひっくり返したような床。そんな地獄絵図のような部屋の中で、そこだけは輝いていた。

机のイスを引いて、腰を落ち着かせると淹れ立てのコーヒーを口を含み、カオス・クロニクルの世界へと戻る。

「ただいま」

「エルくんおかー^^」

「ぬを。中尉、おかえり」

「おかえりい」

待っていてくれた。昨日今日出会ったばかりの3人は、確かにそこにおいて、オレの事を待っていた。

「行こう、炎の祭壇へ」

エルトは歩き出す。その背中を追うように3人が付いてくる。いつかまた……1年前のようにオレはこいつらと仲良くなれるのだろうか？

狩り場はみんなのもの

村のテレポーターまで歩いて、そこから一気に炎の祭壇へとテレポートする。

炎の祭壇は30代前半の狩り場だ。けっこう格上のMOBがうろちよろしているが、今日はエンチャンターもいるし、HP管理はオレが一手に引き受けるので、全滅することは無いだろう。

ちなみに、MOBと9レベル以上の差があるので、オレには経験値が入らない。だから、あえてそれを利用してオレもパーティーに入っている。こうすれば、オレが経験値をムダに吸ってしまうこともないし、パーティーメンバー全体に効果が及ぶ『グループヒールライト』が使える。逐一メンバーのコンディションが確認できるというのも大きな利点である。

めらめらと燃え盛る炎の沼。辺り一体は炎以外に何もなく、火属性のMOBがうじゃうじゃと沸いている。中央の祭壇……単なる岩山にはしごをかけた程度の物だが、そこにエリアボス『フレイムガイスト』が待ち構えている。

このメンツでは心許ないので討伐はしない。

カオス・クロニクルは最大で6人までパーティーを組める。基本的には、ナイト、ヒーラー、エンチャンター+それ以外の職3人という構成がスタンダードだ。討伐するにしても、もう一人くらい欲しい。

それに、種族ボーナスも考えると、エルフとダークエルフがいれ

ば文句がないのだが……。

種族ボーナスについて説明すると、各種族ごとにパーティーを組んだとき、メンバーに強化魔法が適用されるのだ。種族それぞれに固有のボーナスがあるのだが、6種族それぞれがバラバラに参加していれば6種のボーナスが得られるわけだ。

とはいえ、一人でもプンの狩り友候補が来てくれたのでこれ以上の文句は言えないか。

「さて……プンのためにも少しパーティーらしく狩りをしてみるかな。ヤマモトはTL。プンはFA。オレは状況に応じてスリープとヒールを。すperiおるは臨機応変に攻撃」

「ぬを。TLか、了解！」

「あいよー」

「@@?」

ヤマモトとすperiおるはすぐさま理解してくれたが、プンだけはまったくわかりませんオーラを放出していた。

「プン、TLっていうのはターゲットリーダー。それぞれがバラバラにMOBを攻撃したら効率が悪いだろ？ だから誰のターゲットに合わせるかを決めておくんだ」

TLは非常に重要な役柄でもある。優先して倒すべきMOBを選定するのもそうだが、ナイトのヘイトからもれたMOBや、予期せぬMOBとのリンク時に適切な判断が必要になる。

もう一つの意味として、トーカーリーダーというのもあったりするのだが……これもまた、重要だ。パーティー内のチャットを盛り上げ狩りを退屈にしない。これは誰にでもできることではないが。

「FAは、ファーストアタック。要するにMOBを最初に攻撃するプレイヤーだな。これは性質上ナイトの役割だ。MOBへの攻撃を優先して繰り出し、ヘイトスキルを使って敵対心をあおる。そうすればMOBの攻撃はお前に集中する……大丈夫。お前のHPは常にオレが見ているし、危ないと思ったら即リターンする。損な役割かもしれないけど、これができればお前は立派なナイトだよ」

「うーん、わかんないよお;;」

「そうだな……簡単に言えば、ヤマモトのターゲットしているMOBにヘイトをかける。それを倒したらまたヤマモトのターゲットしたMOBにヘイト。その繰り返しになるな」

「わかった！ ヤマちゃんに合わせればいいんだね！ それならおバカなプンでもできちゃうW＜W」

「そうか。それじゃ早速始めよう」

「;;」

「なんだ、プン？」

「プンはおバカじゃないよ^^ っていうフォロー待ってるのに、どうして誰もそう言ってくれないの！」

しばらく皆沈黙して。

「プンはおバカじゃないよ^^ これで、いいのか？」

素っ気無くそうタイピングしてみた。

「心がこもってないよ@@;」

「お前はアホか。初心者なんて皆最初は解らない事だらけさ。やってる内になれりゃいいんだ。オレだって最初はそうだったんだし、気にするな」

「そうそう！ ぼくちなんか、最初ダークエルフのおねーさまのお尻ばかり見てたら、今度はエルフのおにゃのこの生足に目が行って、ドワ娘のツインテールでうっとりしてたら、いつの間にかパーティー追い出されてたよ！ プンちゃんはハアハア指数が半端ないから、いっぱい失敗しても大丈夫！ 初心者さんにはよくあることだよん！」

「ヤマモト」

「ぬを。中尉、何か？」

「お前がミスったら即追放する」

「ひどす！」

ひどくないだろう。ここまでエロバカいとは、想像できなかったが。……男キャラでよかった。そんな風に見られてたらと思うとゾっとする。

「じゃあ、プンも注意しなきゃ。エルくんの横顔にうつとりしてる暇はなさそう。。」

男キャラでも、見られることは見られるらしい……。

「……そろそろ始めねえ？ 俺もう、プンのスカートの中のぞくの飽きたよ」

のぞくなよ。

とりあえず狩り場での諸注意を話し終えた後、オレ達はさっそく狩りをする事になった。狩りに入る前にすperiおるが習得しているバフをかけて、戦闘力を上げスタート。

ヤマモトがファイアスピリットというザコモOBにターゲットし、プンがそれをヘイトする。プンめがけて襲い掛かるMOBをヤマモトが攻撃し、すperiおるがその補助をする。

「ぬを。やっぱバフがあるとぜんぜん違うお！ トランザム発動したみたいだお！ キラ・ヤマモト、目標を駆逐する！」

「ヤマモトうっざ」

「ヤマモトにはヒールなしだな」

「ヤマちゃんうるさい^^」

「ぬお。これなんてイジメΣ（。D。）；」

順調にMOBを倒していく。初めはミスを重ねていたブンだったが、次第に慣れていき、今では攻撃しながらチャットできるくらい余裕が生まれていた。いい感じだ。

ブンは成長している。チャットの速さもだが、順調にレベルも上がっているし、自分の立ち位置をちゃんと理解できるようになった。昨日今日でここまで成長しているのを見ると、付き合った甲斐もあるというものだ。

……やればできる子なんだな。

とはいえ、ブンはフェイブナイトだ。気を抜けば一瞬で瀕死状態になってしまうので非常にヒヤヒヤさせられる。常にHPゲージが4分の3以上ある状態をキープしておかなくてはならない。

狩り始めて、20分ほどした時……それは唐突に起った。

ブンがヤマモトのターゲットしたMOBにヘイトをかける。MOBがこちらにやってきて、いきなり倒れた。まだ、攻撃していないはずなのに。

「はりゃ？」

「ぬを。ブンちゃん攻撃した??」

「ううん、してないよー?」

倒れたMOBをよく見ると、矢が3本刺さっている。カメラを回して周囲を見渡すと、炎の向こう側に3つの人影があった。

「横殴り……か？」

オレが呟いてすぐ、3つの人影がこちらにやってくる。それは、3人のエルフの女性だった。3人とも同じ装備、同じ髪型、同じ顔である。ただし、髪色だけは違っている。

「げえ。肉屋だ。うっぜ。ここ、あいつのナワバリだったんかあ」

「すperiおるちゃん、お肉屋さんなんてどこにもないよ@@?」

「プン。あいつらの名前見てみる」

「えっと。豚肉500g、牛肉500g、鶏肉500g……?」

『肉屋』はエルフアーチャー3人の事を指している。豚肉500g、牛肉500g、鶏肉500gという3キャラではあるが、あれを操作しているのはたった一人の人間なのだ。

3PC……3つのPCでマクロを駆使して同時に3キャラクターを操作する風変わりなプレイヤーで、キャラの名前から『肉屋』と呼ばれるようになった。

しかも、この肉屋。狩りのマナーがすこぶる悪い。一旦狩り場に引きこもると、5時間はずっと独占していて他のプレイヤーが近づこうものなら、周囲のMOBを全て乱獲してまで独占しようとする。

一般プレイヤーからは嫌われている存在だ。その肉屋がここにいる……ということは、この狩り場もあいつに独占されてしまうだろう。

「ここ、使ってます」

真ん中の金髪のエルフ……おそらく、これがメインとしているキヤラなのだろう、豚肉500gがそう言うやいなや、オレに向って矢を放った。

矢がものすごい勢いでオレに迫り——命中する。

しかし、矢がオレをすり抜けて、真後ろに出現したMOBに命中した。

「邪魔」

「ぬを。いくら金髪エルフぺったんこ生足ステキっ子でも許せん。お前にはハアハアせんぞ!」

「ヤマト、後ろにすっこんでバナナでも食ってる。豚肉500gさん。ここはオレ達が20分以上前から狩りをしていたんです。狩場はみんなの物でしょう? みんなで譲りあって——」

オレのセリフが終わるまでに、周囲はMOBの死体でいっぱいになっていた。なおも3人のエルフは弓を引き、矢を放つ。

「だから?」

こいつは人の話を聞くつもりなどないらしい。

……どうするか。

リアルなオレとエルト

「場所を変えよう。もう少し奥にいけば、弓矢に耐性のあるMOBがいたはずだ。いくら肉屋でもそれは狙わないだろう。せっかくここに来たんだ、あいつに何を言われようとオレ達はここで狩る。嫌な思いをした奴もいるかもしれないけど、我慢してくれ……PVPなんてこと、したくはないし」

「いやーしょうがないんじゃない？ 肉屋は何を言ってもムダだから絶対ここかねーよ。それより、むしろ弓矢耐性のMOBをあいつの目の前で狩りまくってやろーぜ。その方が楽しいわ」

すperiおるはそう言つて、一足先に炎の奥へと消えて行った。

「ぼくちは、中尉の言う事に従いますお。確かにあの人はちょっとムカつくけど、生足がステキだからこれ以上はなーんも言えませんな。は！？ あの危なっかしい走り方のすperiおるたん……ハアハア。ぬを。けれどすperiおるたん、中身男……うう。ぼくちはどうすれば……」

ヤマモトは結局ハアハア言いながらすperiおるの後を追っていた。何でもいいのかあいつは。

「ブン。奥に行こう。ここよりちょっと強いけど、邪魔されるよりマシだ」

「何で」

「ん？」

「何でみんな仲良く一緒に狩れないのかな」>< みんなで狩ったほうが絶対楽しいのに。」

「そうだな。でも、それぞれ事情があるんだよ。一人で狩りたい奴だっているし、時間がないから他人に付き合ってる暇もないのかもしれない」

オレも他人の事は言えないが……。

プンはまだ納得していない様子だが、オレが歩き出すとプンも離れまいとすぐさま後を追ってきた。

場所を変えて、再度すperiおるのバフを受けて狩りを始める。M O Bの攻撃が少し激しくなったが、狩れないほどのことじゃない。

遠くから矢を放つ音がひっきりなしに聞こえてくるので、肉屋の乱獲は健在のようだ。だが、目論見通りこのあたりは弓矢が通じないM O Bいるので、近くには寄ってこない。

正直、『邪魔』と言われたときにはカチンと来たが、熱くならなくてよかったと思う。今のオレは一人じゃない。不本意ながら……プンのお世話係りでもある。

そのプンと狩り友となってくれるかもしれない、すperiおるの前で問題を起こすのは得策じゃない。すperiおる本人も憤慨していたが、彼はあれでいてギルドのマスターだ。

後々に問題になるような事を起こしてはならない。ギルドマスターはギルドの顔だから、その下にいるギルメンにまで迷惑をかけて

しまうことになる。

ギルドマスターはギルメンの事を第一に考えなければいけないんだ。ギルメンは仲間であって家族同然なんだから……。

だから、これはプンを思っただけの行動ではない。すべりおるとプンの関係を円滑に深めてもらうための措置だ。

それは回りまわってオレのためである。こいつがレベル40になればそれまでだ。

「ぬを。プんちゃんレベルアップおめええええ！　いくつになったの？」

「ありがとー！　28になっちゃった！　えへV^^V」

あと12レベル……意外とその日は近いのかもしれない。そうなれば、目的のアイテムを得て、プんとお別れだ。このまま順調に育てば、あるいは樅並みに化けるかもしれないな。

「ぎゃーー><　間違えてエリアボスさんにヘイトしちゃったああ@@;;　エルくん助けてええええ」

「お前はアホか。なんでよりによってエリアボスにヘイトした！　少し見直したオレの感傷に浸った時間を返せ！」

前言撤回だ。こいつが樅並みに化けるなんてありえない。あいつは冷静で努力家なんだ。こんなに天然ボケてない。

「全員オレの周りに集まれ！　リターンを発動させる」

「ぬを。フレイムガイストたんがハアハア言ってるお！　ぎゃーす！　一撃でぼくちん、死んだ（（。D。））　ぱねえっす！」

ヤマモトの尊い犠牲のお陰でオレ達は無事にリターンでミロンに帰還することができた。

「ヤマちゃん、ごめんよー；；；」

村の広場でヤマモトが大の字になって倒れている。死体ごと村中に転送されたようだ。それを見つけたプンがすぐさまヤマモトに駆けつけた。

「ぬを。プンちゃん、もつとこっちへカモンです。そーそー。あ、もうちょつと右。あ、いきすぎ……半歩左へ」

「このへん^^？」

「ばっちぐー！　このアングル。マジで神です！　さっそくスクリーンショットにとって寝る前にハアハアを」

すぐにリザレクションをかけてヤマモトを蘇生させた。

「ぬを。まだ保存してないのに！　中尉、男のロマンを何とするのですか！」

「黙れド変態」

「そんな事言って。中尉だってほんとに興味あるんでしょお？　男子にとって、女子のスカートの下はまさに聖域！　シャングリラ

！ ユートピア！ ア・バオア・クー！」

「オレ、女に興味は無いから」

「な、なんですと！？　まさか、中尉は……」

「ああ。オレ、リアル17歳の女子高生なんだ」

「えええええええええええええええ！？」

「って言ったら面白いだろう？」

「なるんだ。びっくりした冗談だったのかあ。一瞬ほんとにそうか
 と思ったでござすよ。このキラ・ヤマモト修行が足りませんでした
 ……」

「オレだって冗談くらいは言うさ。それより……プン！ エリアボスに間違つてヘイトとかお前は面白い奴だよ。一緒にいてスリリングで飽きないわ」

「えへへへへへでしよでしよ><><」

「ほめてねーよ！」

「あ。エルトよーい。俺、このへんで抜けるわ。明日早いし。そろそろ寝ないと、嫁に殺される」

すperiおるがオレ達の会話に割って入ってくる。……嫁？

「ぬを。すperiおるたんも冗談がうまいですな。どうせあれでし

よ？ ディスプレイの中の嫁でそ？ ちなみにぼくちは、姉と妹と娘とお母さんも極秘フォルダにいますお」

「いや。俺ウソつかねーし」

「ヤマモト。お前、マジきもいな」

「ヤマちゃん、見損ないました＞＜」

「な、なんですかこの空気は。ぼくちは中尉と違って健全な男子なのにな。ん。」

「エルくんはかつこよくて優しいからいいけど、ヤマちゃんはダメなの＞＜」

「だそうだ、ヤマモト。今日はこの辺で終わりにしよう。お前もさつさとログアウトして、極秘フォルダ開いてハアハアしとけ」

「くそお！ 中尉が泣いて謝って土下座してフォルダの中身を見せてくださいと頼んできたら、見せてやるからなー＞＜ さらにじゃボケーー！」

ヤマモトは捨てセリフを残して去っていった。ていうか、始めから見せる気があるんじゃないか。別に見たくないけど。

「ほんじゃー落ちるわな。っと。チビがぐずり出した。ああ、それと！ 今日、楽しかったぜ！ なんか、始めたころを思い出したよ。狩りってこんな風に楽しかったんだな。今じゃレベル上げも単なる作業だ。お前らと組めてよかったよ。また今度機会があればどっかいこーぜ！ じゃあな」

すperiおるはソーシャルでかわいらしく一回転すると、フェードアウトして消えて行った。あとに残されたのはオレとブンだけだ。

「エルくん、ありがと^^」

「何が？」

「ブン、また一人お友達ができたし、知らない狩り場に連れて行ってもらえた。それに、パーティーでの狩り方もお勉強になったよ！」

「そうか。それはよかった」

「ブンは妄想しちゃうのです、リアルのエルクンも、きっとクールそうに見えて熱くて優しい男の子なんじゃないかって><b」

「勝手に妄想するな」

「背は190CM以上あって、アイドルみたいにかっこいい顔で、声はちょっと低めで、特技はブラジリアン柔術@！」

「なんだそれは」

なんでオレの特技がブラジリアン柔術なのかも突っ込みたい。

「いつかね。リアルでエルくんに会えるといいな^^」

「オフ会がしたいのか？」

「うん@@w ヤマちゃんも、すperiおるちゃんも呼んでみんなで

「お話するの！」

「オレはパス。そういうのに興味ないから」

リアルを持ち出すな。ゲームはゲームだ。ここでのオレはエルトであって、リアルのオレは関係ない。

「うーん、そっか；；　じゃあしょうがないね。それじゃプンも落ちるね！　宿題まだなんだった@o@　数学は苦手ナンデス……」

「数学はオレも苦手だな。英語とか古文なら教えてあげれるかもだけど」

「エルくんも文系かー。でもプンは英語まったく苦手です！　昔の日本の偉い人に、プンが生まれまで鎖国しとけ@@!　と言ってやりたくらいなの；；」

「無茶を言うな」

「あは。それじゃ、プンも落ちるねーお休み、エルくんzzz」

「ああ、お休み」

目の前でプンがログアウトしたのを確認し、オレもまたログアウトしてPCの電源を切った。

ボーナスチャンス到来!?

「オフ会……ね」

自室の学習機のイスに体重を預け、電源が切れたPCを見つめる。真っ暗な液晶画面には何も映し出されていない。それは、リアルのおれの瞳も同じ。

1年前のあれ以来、他人に対してまったく興味がなくなってしまった。けれど、無愛想な顔をして他人を避けていたら、周囲に敵を作りかねない。

だから、作り笑いをして、浅く付き合っただけで本心は決して見せないようにしている。深い所まで踏み込まれたくない。母親が言ったような、友達を家に連れてくるなんて事は未来永劫ないだろう。

それに、こんな部屋見たらみんなドン引きするだろうし。

ふと、プンの言葉を思い出す。

『リアルでエルくんに出会えるといいな^^』

ゲームの中のおれとリアルのおれでは違いすぎる。プンはきっと幻滅するだろうな。だから、会わないほうがいい。

カオス・クロニクルの世界では、容姿をいくらでも美しく設定することが可能だ。だから、そこにリアルの自分の容姿の美醜は関係ない。

ありのままのそいつの姿が……心が浮き彫りになる。文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来るんだ。

一体オレの何がいいと言うんだろうか？ オレは偽善者なんだぞ、ブン。

空になったマグカップを片手に、部屋のドアを開けると就寝前のコーヒーを飲むためリビングへと降りていった。

今日も眠い。俺は必死になってあくびをかみ殺しながら、駅の改札をすり抜け学校へと向っていた。

俺の周りには、詰襟の学生服に身を包んだ少年や、黒い生地に白い刺繍のセーラー服に身を包んだ同い年くらいの少女達。

俺の通っている高校の生徒達だ。女子の制服はシンプルだが、胸の白いリボンが大きなチャームポイントで、近所の大きなお友達の間でも人気のある一品だ。シンプルなところがいいらしい。

いや、これは稲田から仕入れた情報だが。

駅から高校までは歩いて20分ほどかかる。その行程も半分以上を終え、学校を視界の端に捉えた時、石鹸のいい香りがした。

俺には解る。彼女だ。

「相羽さん！　おはよう」

振り返って昨日の夜一生懸命練習した、対相羽　真理奈専用挨拶を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせた。――はず。

「あ、ちょっと待ってよ！」

無視されてしまった。

さては、照れているのか相羽　真理奈！？　ふはは。そうだろう
そうだろう。3時間かけて編み出した俺の最終奥義である。これが
直撃して無事な女子はいないはず！

「あの……相羽さん??」

歩く速度が早い。もしか、予想以上の破壊力だったか？

俺も速度を上げて彼女の横に並んで歩く。と、ようやくこちらを
振り返ってくれた。

「誰……?」

「へ?」

「私、急いでますので」

「ええ?　ちょっと待って、俺だよ、同じクラスで隣の席の、渡辺
だよ！」

「……ああ！ 渡辺くん。ごめんね、私。寝ぼけてたみたい」

普通に俺の事を忘れていたみたいだ。軽くショックである。けれど、その爽やかな笑顔で俺の心は一瞬で満たされる。

真新しいセーラー服に身を包んだ彼女の姿は、さながら女神のようだ。太陽の光を受け、神々しさすら感じる。

油断してしまったせいかな、大きなあくびが一つ俺の口から出てしまった。やばい。今の俺はすごく不細工な顔だっただろう。

「……寝不足なの？」

「あ！ う、うん。ちょっと夜遅くまでゲームやってて！ カオス・クロニクルっていうネットゲなんだけど……」

「カオス・クロニクル？」

一瞬で相羽さんの目が大きく見開かれる。相当驚いた様子だ。驚いた顔もカワイイ。この表情はレアかもしれないな。

「あれ？ もしかして、相羽さん知ってるの？ 昔は人気あったみたいだけど、今はもうマイナーもいいところなんだよね」

「あ、ううん。前の学校でプレイしている人がいたから……渡辺くん。カオス・クロニクルやってるんだ……長いの？」

「んー。まだ1年くらいかな？ 初めてプレイした時、ぜんぜん操作が解らなかったんだけど、カインっていう親切な人が色々教えてくれたんだ。まるで兄貴みたいな人だったよ。でっかいギルドのマ

スターもやっててさ、何だっけ？ えっと灰色の狼？ すっごく強くて、かっこよくて……憧れたなあ」

「カインが……教えた……そう。そう……なんだ」

「相羽さんもやってみない？ 俺がめいっぱいサポートするからさ。きっと楽しいよ？」

これはチャンスだ。相羽さんと接点が出来た。カオス・クロニクルと一緒にプレイして、相羽さんとの思い出を積み重ねていく……学校以外で彼女と過ごす時間を作れる。

「ごめんなさい。私、パソコン苦手なの。だから……」

「あ。ああ、そっか。残念だなあ。でも、もし気が変わったら教えてよ。いつでも育成手伝うからさ！」

「うん。ありがとうね、渡辺くん」

残念だ。相羽さんをエルフのヒーラーにして、ヒールしてもらえたり、ドワ娘のエンチャンターにして、バフをかけてもらったり、ダークエルフのナイトにして、守ってもらいたいという、一瞬の妄想が盛大に弾けとんだ。

「私、先に行くね」

相羽さんはさっと駆けて行く。学校の昇降口に入って、下駄箱から上靴を履き替える姿に見とれてしまう。相羽さんのスカート丈はけっこう短い。他の女子に比べるとまだ長いほうだが……。

履き替えるその瞬間にかがみこむ姿勢になって、黒いプリーツスカートから、かぶりつきたくなるような、艶のある白い太ももが露になった。

俺はたまらず息を飲んだ。これは、まさか。

ボーナスチャンス!?

あ！ あとちょっと！ もう少し、そうだ。そのまま……。

「ナ〜ベ〜！ よ、おはようさん！」

俺の願いは叶うことなく、代わりに稲田のダミ声と、メガネのフレームが視界に入り込んできた。

「あん!？」

「な、なんだよ何でそんな怖い顔で睨んでんの？ 俺、お前に何かした??？」

「お前は全世界の夢見る青少年の敵だ」

稲田の顔を無理矢理どけると、そこにはすでに相羽さんの姿はなかった。

駅前で発生したイベント

今日も相羽さんの周りにはいつも誰かがいて、賑やかな渦を形作っていた。

俺が付け入る隙なんてまったくない。授業中ちらちらと隣を盗み見る程度で、話しかけるタイミングが中々みつからない。

カオス・クロニクルと一緒にプレイできれば、学校で話しかけれなくても別に気にする必要はないけど……。しつこく誘ったら嫌われちゃうし。

……何か接点が欲しいな。

そんなことをずっと思案していたら、いつのまにか火曜日の授業が全て終わっていた。

「相羽さーん。一緒に帰ろ〜」

女子グループのリーダーが、カバンに教科書をしまい終った相羽さんに話しかけた。

「……ごめんなさい。今日は、家の用事で早く帰らないといけないの」

「そうなんだ〜。じゃ、また明日ね!」

「ごめんなさい」

相羽さんはそう言うと、カバンをつかんで足早に教室を去って行った。転校してまだ間もないから、まだまだ忙しいんだろうな。

話しかけた女子も同じように思ったらしく、相羽さんを引きとめる事はしなかった。

……俺も帰るかな。確か今日は漫画の発売日だ。駅前の本屋に寄って帰るか。

学校を出ると、朝通った通学路を遡って駅へと向う。

駅前には本屋やスーパー、銀行や飲食店が立ち並び、夕方にもなれば人でごった返している。目的の品を手に入れるべく、大型チェーン店の本屋へと足を踏み入れた。

無事に目当ての物を購入して、駅へと向おうとした時だ。本屋のすぐ入り口で大きな袋を抱えた女の子がうずくまっていた。白い長袖のTシャツにジーンズ姿の、中学1、2年生くらいのかわいらしい子だ。

袋の中身は大量のインスタントコーヒーで、駅前のスーパーの袋にそれがはちきれんばかりに押し込まれている。

あれだけの量を女の子が運ぶのは、きついだろうな。けれど、ちやうど電車が来るいい時間だ。これを逃がすとちよっと待たなければならぬ。

俺は心の中で彼女に手を合わせて、目を合わせないように過ぎ去ろうとした。

一生懸命に袋を両手で抱えようと立ち上がる彼女。ふと、その横顔が視界に入って俺は足を止めた。

その横顔に見覚えがある。つい最近、どこかで会ったような気がする。そんな考えを巡らせていると、目の前でインスタントコーヒーの瓶が大量にばら撒かれた。

「あ！　ご、ごめんなさい！　おケガはありませんか？」

「ああ。大丈夫。ほら、これ。あ、こっちにも」

「あ、ありがとうございます。お優しいんですね」

コーヒーの瓶をつかんだ白く細い腕をたどっていくと、気の弱そうな瞳と目が合った。黒い髪は男の子のように短く切りそろえられており、その下の顔はドワ娘のような愛らしさがあって、きゅっときつく結ばれた唇が緊張をあらわしていた。

瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな感じである。

「すごい量のコーヒーだね。これ、全部君の？」

「いえ、お姉ちゃんのです。ぼく、コーヒーは苦くて飲めないから……ごめんなさい」

何故か謝られた。

「いや、それよりこんな大量のコーヒーを妹一人に買いに行かせるなんて、鬼みたいな姉貴だな！　俺だったらそんな姉貴にソバット入れるね！」

「や、やめてください！ お姉ちゃんは何も悪くないんです。ぼくがいつも、ドジで泣き虫だから……ごめんなさい」

また謝られた。

なんだか見ていてかわいそうになった。しょうがない。乗りかかった船だ。どうせ帰ってやることといったら、ゲームくらいだし、たまにはボランティアも悪くないだろ。

「君、お家どこ？ よかったら――」

「やめてください！ 誰か、助けて！」

「は？」

「お姉ちゃんに言われてるんです。知らないおじさんに声をかけられたら、股間を蹴り潰して顔面にツバ吐いて逃げろって……ぼく、ツバを吐くのはちょっと……」

どんな姉貴だ！ てか、股間を蹴るのに容赦は無いのかこの子は。

「別に怪しいもんじゃないよ（このセリフ、怪しい奴のセリフか）。この近くの高校の生徒なんだ。ほら、学生証。な？ 目の前で困っている女の子がいたら助けるのは当然……」

俺、さりげにサムいな。

「ごめんなさい！」

「いや、だから謝らなくてもいいって。体力には自信があるし」

「あの、そうじゃなくて……ぼく、男……です」

電撃が俺の体中を駆け巡った。この子は一体何を言っているのだろうか、一瞬思考が停止する。

「え？ オトコ？ ああ、音子とかいう名前？」

「ぼくの名前、潤です！ 音子じゃありません！」

きょうだい

潤は、小さな肩を震わせ頬を赤く染めて叫んだ。それに驚いた周囲の人々が何事かと振り向き、俺は冷たい視線の集中砲火を受ける。

潤の瞳はすでに決壊寸前のダムのようになっていて、今にも泣き出しそうだ。

「あ、えーと。潤。その、気に障ったなら謝るよ。ごめん。その、純粹に助けただけなんだ。その、重そうだったから」

「ごめんなさい。取り乱してしまいました。お姉ちゃんにもよく言われるんです。『あんたは男らしくない』って……毎日……だから、ごめんなさい」

「いや、そんなに謝らなくても……とにかくさ。半分持ってあげるよ。俺、目の前で誰かが困っていたらほっとけないんだ。だからさ、手伝わせてくれよ」

潤は、まるで信じられない物を見るような目で、俺の顔をじっと見つめる。背は俺よりも10cmは低い。上目づかいで見つめられている形になっているわけだが……。

やはりこの子の顔……どこかで覚えがある？　けれど、潤に出会ったのは今日が初めてだ。最近出会った誰かに似ている……だめだな、答えが出てこない。

頭の引き出しを一生懸命ほじくり返していると、潤が少しはにかんだ様子でぼそぼそとしゃべりだした。

「あの……じゃあ、お願いします。本当はぼく、少し困っていたんです。ごめんなさい」

『ごめんなさい』というのが口癖になってしまっているのか、潤の口からは何度も『ごめんなさい』が連呼されている。

「じゃあ、俺こっち持つよ。で、家はどっち？」

「あの、三丁目です。ここからだとも10分くらい歩いた所になりますね。付いてきてください」

潤はそう言うのと、俺に背中を向けて高校の方向に歩き出した。すると、みるみる小さな背中が遠ざかっていく。

「って歩くの早いな。ちょっと待ってくれ、潤」

速度を上げて潤に追いつくと、横に並んで一緒に歩き出す。

「それにしても……ほんとすごい量のコーヒーだな。これを1人で飲むのか、君のおねーさまは」

「お姉ちゃん、コーヒー大好きなんです。お砂糖も、ミルクも入れずに飲んじゃうんですよ。すごいです。それにしても、この街に親切な人がいて本当に良かった。越してきてまだそんなに時間が経ってないから、知り合いも少ないんです」

「そうなんだ？　じゃあ、このへんはまだあんまり詳しくないのか」

「はい。だから、本当は声をかけてくださった時、すっごく嬉しか

ったんです。でも、誰にも迷惑をかけたくなって……」

「気にするなよ。俺でよければいくらでも声をかけてくれ。困っていることがあるなら、力になるぜ？」

「ありがとうございます！ よかった……いい人に知り合えて。あ、そういえば……まだお名前聞いてませんでした。ごめんなさい」

そういえば、まだ名乗ってなかったな。

「ああ。渡辺 翔っていうんだ」

「渡辺さんですね。本当にありがとうございます。けど……どうしてそんなに親切にしてくれるんですか？」

「ん？ んー。ゲームでさ。ものすごく親切にしてくれた人がいたんだよ。それまでの俺って、別段他人に興味が無くてさ。目の前で誰が転げようが、ケガをしようが見て見ぬフリをする人間味のない奴だったんだ。そんな俺に、1から10までそのゲームの事を手取り足取り教えてくれて……勉強も教えてくれたっけ。とにかく、誰にでも優しくって、強い人がいてさ。憧れたんだ。俺もあんな風になりたいって」

「そうなんですか」

「けれど、ある日……その人は俺の目の前から突然姿を消した。後で聞いた話じゃ、初心者の手をしてる時に何かあったらしくて……しかも、それが原因で自分の作ったギルドからも追い出されて仲間からも色々言われたらしくてね……。俺は、そのことを知らなかったとはいえ、力になれなかったんだ。あれだけ世話になったの

に……だからさ。目の前で困っている人は助けてあげようって思うようになった。ゲームの中でも、リアルでもね」

カインは、多くの事を俺に教えてくれた。だから……俺もカインのように優しくなりたいと思った。だから、相羽さんがカオス・クロニクルをプレイするのであれば、カインがしてくれたように接してあげたい。

「すごい人ですね。渡辺さんって」

潤が瞳をうるうると輝かせながら、感動していた。

「いや、すごいっていうのならあの人だよ。いつかリアルで会えたらなって、ずっと思ってたけど……MMOだからな。きっと色々あるんだ」

「そうなんですか……それ、なんていうゲームなんですか？　ぼくもやってみたくまりました。渡辺さんのやっているゲーム！」

「カオス・クロニクルだよ。基本料金は無料だから、PCとネットの環境さえあれば、大丈夫」

動作するために必要なスペックもあるが、細かく話すと長くなってしまうので、この場は置いておこう。

「それ、知ってます！　うちのお姉ちゃんも昔やってました。今はどうかかわらないけど……」

「そっかー。じゃあ、潤のねーちゃんとどこかであってるかもしれないな、俺。世間って狭いね」

「あ、でも。ぼくP C音痴なんです。お姉ちゃんはすごく詳しいんですけど、カオス・クロニクルの話に触れると怖くって……」

「持っているのはノート？」

「はい」

「それなら、今度俺がセットアップしてあげるよ。家にはクライアントデータの入ったC D R O Mがあるし」

ちなみに、カオス・クロニクルのゲーム本体は公式ホームページから無料でダウンロードできる。

「本当ですか！？　じゃあ、明日行ってもいいですか？」

「明日か……いいよ。水曜は5時間目で終わるし、駅前で待ち合わせしようか？」

「はい。じゃあ、ぼくの携帯のメルアド教えておきますね」

潤はそう言うと、コーヒーの袋を地面に置いてポケットから携帯を取り出した。

俺も胸ポケットから携帯を取り出し、赤外線通信で番号を交換する。

「これでよし。じゃあ、明日はP C持って駅前に……そうだな。3時でいいかな。着いたらメールいれるからね」

「はい。本当にありがとうございます、渡辺さん。あ、ぼくの家すぐそこなんで、ここまででいいです!」

俺は持っていた袋を潤の左手に握らせた。

「潤はたいへんだな。俺は長男で下に妹がいるから、姉貴がいる奴の気持ちはわからないけど、苦労しそうだ」

「そんなことないですよ。確かにお姉ちゃん、普段は怖いけど優しい時もあるし、両親がいない時はご飯も作ってくれるんです。それに……たった一人のお姉ちゃんですから。だから、大事にしないと」

「今の言葉……家の妹のアホにも聞かせてやりたい! あいつ、俺に蹴り入れるわ。家族共用のPCに入れたエロ画像を全部削除するわ。トイレに忘れたエロ本を、俺の部屋でキャンプファイヤーするわ……妹の風上にもおけん奴なんだ!」

「えっと……それはたいへんですね」

俺の2つ年下の妹……名を愛紗あいさという。とにかくにも生意気で、兄妹仲は基本的に悪い。潤の性格を少しは見習ってもらいたいものである。ていうか、潤みたいな弟が欲しかった。今から両親に頼んでも、もう頑張れないから無理だろうけど。

「それじゃあな、潤。色々がんばれよ」

「はい、色々がんばります。さようなら、渡辺さん!」

潤の後姿が住宅街の角で消えて、俺も歩き出す。しばらく駅までの道を歩いていたが、ふと思いつ出して携帯の電話帳をチェックして

みた。

潤の番号などを一応確認しておこう。電話帳を開いてすぐに潤の名前が見つかった。フルネームで登録しているらしく、あ行のトップにその名前があったからだ。

「相羽 潤……。相羽？ 相羽さんと同じ名字か……。偶然か？」

ザ・ヤマモトセカンド

いや、まて……そういえば、潤は姉がいると言っていた。相羽という名字は珍しいと思う。それに、今になって考えれば潤の横顔が誰に似ているかだなんて、すごく簡単な事だ。

相羽 真理奈。彼女は潤の姉なのだ。そして、またまた潤の話通りであれば、カオス・クロニクルをプレイしていたという……けれど、朝会ったときはプレイしていないと言った。

『カオス・クロニクルの話に触れると怖くって』という潤の言葉。もしかしたら、何かあったのかもしれない。けど、何が？ 解らない……。

そういえば、朝、カインの話題になった時……視線が鋭くなった。あれは気のせいなんかじゃない。まるで別人のような……。

相羽さんは……カインのリアルの知り合いなのか？ もしくは、俺と同じようにカインに世話になった初心者の一人かもしれない。

聞きたい。そう思った。もし、カインの事を知っているなら……カインに会ってみたい。今どこでどうしているのか、今のカオス・クロニクルの状況を伝えたい。

カインが戻ってくれば、きっと前のような活気に満ちて……俺も、灰色の狼に戻るかもしれない。そしてもう一度、カインと一緒に冒険がしたい。あの頃みたいに……。

とはいえ、この話題は彼女の前ではタブーらしい。普通に聞き出

すのは無理だな……どうするか。

俺は駅の改札を通ると、ホームで電車を待ち続けながら色々なことに思いを馳せていた。

樫。フェイブナイトで現サーバー最強のナイト。彼に出会ったのは1年近く前……。

今のプンのように装備がめちゃくちゃで、TLとは違うMOBを攻撃したり、ダンジョンで迷子になって狩り開始の時間が30分も遅れたことがあった。

でも、真面目な奴で教えた事はすぐに覚えるし、ときおり言う冗談もなかなか笑えるし、優しい奴だった。

聞けば、オレと同じ年で高校生らしく、何度か勉強を教えたことがある。ちなみにあいつの樫という名前は、好物のもみじまんじゅうからとってきたらしい。

漢字一文字でとってもカッコイイ名前だと思ったのに、ちょっとがっかりした記憶もある。

いつからかな。樫が隣にるのが当たり前になったのは。ログインするとあいつがいて、ギルドメンバー数人を引き連れギルドハン ト……ギルメンのみで構成されたパーティーで狩りをしたものだ。

柊と話したい。あいつはいつもオレの味方だったから……新しい生活に、新しい家に、新しい繋がり……正直、かなり戸惑っている。柊と話して……でも、今のはオレは『エルト』なのだ。柊の知っているオレではない。だから、無理なんだ。けれど……。

「エルくん。こんばんわんわん（^▽^）ノ」

いつの間にかブンがログインして、オレの目の前に立っていた。

「ああ、ブンか。相変わらずだな」

「ブンは相変わらず元気だよ〜^^v ブンから元気取ったら何も残らないもん！」

ブンはぐるぐるとオレの周りを、鎖から解き放たれた犬のように走り回る。ちなみにここは、ミロンの村を一步出た所だ。

「そうだな」

面倒なので、適当に相槌を打っておく。

「エルくんひどい……」

「そうだな」

「@@@? 何か考え事?？」

走り回るのをやめたブンがオレの前までやってきて、顔を覗き込んできた。

「いや、別に」

「プンでよければ何でも相談にのるよ〜^^ まさか@ロ@.」

「……何だよ」

「恋の悩みか〜>w< こいつめえ。プンというものがありながらプンプンしちゃうぞ！」

「いや、違うし。オレ、恋なんてしたこともないし、興味とかなから」

これは本当の話。17歳と2ヶ月生きた今でも、恋なんてものはない。何度か告白をされた事はあるが……すべて断ってきた。

「ええ〜つまんない;;」

「つまってくれ。はあ。で、ヤマモトはどこだ？」

一応オレ達はフレンド登録をしているので、それぞれがログインしているかいないかを知る事ができる。さっき確かにヤマモトがログインしていたのだが、いつのまにログアウトしたらしかった。

「わかんないー。どこいったのかな(?!?)」

ヤマモトの姿を求めてカメラを動かすと、ドワーフの少女がそことことこちらに走ってきた。ちなみに、すperiおるではない。

ピンク色のサイドテールの髪に、体には不釣り合いなほど大きな胸

……短めの黄色いスカートのようなローブをはいており、へそが見えている。トップスも黄色いシャツでそれが前述の胸によって窮屈そうなイメージである。

「エルトお兄ちゃん」

少女はオレに向ってソーシャル抱きつくを強要してきた。無論、これを拒否する。

「誰だお前は」

「ひどい！ 私の事忘れちゃうなんて；；」

ドワーフの少女は泣きじゃくり、プンの胸に飛び込んだ。

「よしよし、大丈夫？ エルくんのお知り合いなの？」

「うん！ ちゅーじゃなかった。セイラ、エルトお兄ちゃんのために一生懸命尽くしてきたのに！」

「はあ？ セイラ？」

ドワーフの少女の名前を見ると、セイラ・マスオカという名前だった。こんな名前に心当たりは無い。

「セイラ、お兄ちゃんのこと好きだよ！ だから……お小遣いちょうだい！」

「お前……さっさと失せろ」

「ぬwじゃなつくって、きゃあ！ プンお姉ちゃん、エルトお兄ちゃん
が怖いー；；」

「エルくん、ひどいよー@@ この子がかawaiiそうだよ」

「プン、そこをどけ」

ちなみに、ヒーラーにも一つだけ攻撃魔法がある。『ライトブレット』という名前で、威力はウィザードのそれとは遠く及ばないが、ないよりマシ程度のものだ。

オレの足元に六芒星の魔方陣が発現し、光の塊が目の中の空間から出現すると、それがセイラ・マスオカの体を貫いた。

「ちょっと、エルくん@@!?!」

「ぬを。ぼくちんのHPが一桁に……ガクブル（（。㊦。））」

「ネカマごっこは楽しいか？ ヤマト」

キレイなバラには残念なトゲがある

「フフ。バレてしまっただけは仕方がない。中尉の大好きなロリ巨乳を作成した、あなたの心のオアシス、キラ・ヤマモトでございます（ΦωΦ）」

「いや、ロリも巨乳も興味ないんだが」

「なんですと!？ 中尉め、ぼくちんが6時間かけて作成したセイラちゃんを、お気に召さないとは……」

6時間もこれに時間割いたのか、恐ろしい奴だ。

「ヤマちゃん、気持ち悪いからさっさとキャラクターチェンジして^^」

「ぬを。気持ち悪いσ（。A。）？」

「どこにそんなバカでかい乳揺らした幼女がいる。いや、それ以上に中身がお前だという時点で吐き気がする」

「ひどす! ちくしょうめえ;; せっかく考えた悩殺ポーズで、中尉を昇天させてやろうと思ったのにーばかやろうー>< むっさい緑のおっさんでハアハアいつてやるからなー! 待ってろオオオオ」

セイラ・マスオカは迷惑にもシャウトで叫んで村の中に消えて行った。そして、それと入れ代わる形で本来のヤマモトがやってきた。

やってきたヤマモトは、挨拶代わりにいきなりヘンな事をしゃべりだした。

「べ、別にあんた達と冒険したいわけじゃないんだからね!? 仕方なくんだからね! 勘違いしないでよね!？」

ツンデレのつもりなのだろうか? 面倒くさくなったので、素っ気無く返してやることにした。

「嫌ならいいよ。さようなら」

「ヤマちゃんばいばーい^^ノシ」

「ごめんなさい、冗談デス。中尉、プリンちゃん。どうかこのキラ・ヤマモトを見捨てないでやってください; ㄟ;」

「つまらん冗談はいいから、さっさと狩りにいくぞ」

「ヤマちゃんのこと大好きだから、見捨てるわけないよ^^」

「ぬを。ふふ、プリンちゃん。ようやくぼくちんの魅力に気が付きましたか! 見よこの筋肉。フフ。さあ、おいでプリンちゃん」

「昨日炎の祭壇で戦った、フレイムゾンビさんよりも、ちょっぴりかっこいいもん^^」

「ぬを。MOBと比べられた……orz」

フレイムゾンビとは、干からびたミイラが炎を纏っているイメージのMOBである。これよりちょっぴりかっこいいと言われてはさ

「プンもかまわないよー。ダークエルフのお兄さんって、クールでバイオレンスそうでかつこいいよね（☆▽☆）」

目が星になっている……というか、どこにも男とか書いてないんだが……。

「名前は……K e r b e r o s……ケルベロス？　かな。もろ男っぽい名前なんだが……」

「きつと、ステキなクールガイだよ！　残念だったね、ヤマちゃん
^^w」

「ぬを。なーんだ野郎か……しょぼーん」

3人でマツチに入ると、K e r b e r o s がオレ達を迎えてくれた。

「どうも^^　アタシ、K e r b e r o s ですー。読み辛いし、打ち辛いからケルって呼んでね♪」

「！！　ふふ。ぼくちんの予想通り、お姉さんだった。残念でしたね、プンちゃん！」

「えー；；」

「ケルさん。サモンお願いできますか？」

「はいな^^　ちょっぴり待っててネ」

サマナーにはサモンメンバーという、パーティーメンバーを近くに呼び寄せるスキルがある。これを使えばすぐにメンバーが集められて、狩りの開始をスムーズに行える。

ものの2，3秒でサモンメンバーが発動し、画面が暗転する。

画面の読み込みが始まって景色が開けていくと、周りは木々が生い茂った森の中だった。

ウエルド大森林。30代後半の狩り場で、出現するMOBは主に地属性だ。木に口が生えたマンイーターなど、植物をモチーフにしたものがほとんどである。

木々の間には小さな川が流れており、水の流れる音が心を癒してくれる。昼間はうっすらと霧がたちこめており、MOBさえ出てこなければこの風景を一日中眺めていてもいいかもしれない。

「いらっしやい^^」

大きな木の下に、ダークエルフの女性が一人座り込んでいた。黒い髪が腰まで伸びていて、薄布一枚を素肌に貼り付けたようなローブを身に着けている。丸みを帯びた四肢。妖艶な眼差しと艶やかな唇。まさしくダークエルフのお姉さんだ。

「女の人だー>< ケルベロスっていうから男の人だと思ってましたー」

「そうよね。こんな名前だと勘違いしちゃうよね^^; まぎらわしくてごめんねー」

「いはいはいはいええ！ ギャップ萌えおおいにけっこう！ ハ
アハア」

「ケルさん。フェイブナイトのプンとオークウォーリアのヤマモト
です。二人ともまだそんなに狩りの経験がないけど、仲良くしてや
ってください」

「はい。解りました。アタシも先月始めたばかりだから、そんな
に変わらないと思うけど、よろしくね♪ それじゃ、こっちもダン
ナを紹介しちゃおうかな」

ケルは立ち上がると、少しオレ達と距離を取ってから召喚魔法を
発動した。

ケルの体が少し宙に浮いて、地面に六芒星の魔方陣が発現し、そ
こから炎に包まれた生ける屍……フレイムゾンビが出てきた。

「ああああん。ダーリン。愛してるう♪ ねえねえねえ！ 見てよ
この薄汚れた皮膚と、あるか無いかわからない空洞みたいな目！
足とかこれでマジで立てんの！？ ていうくらいガタガタのヨレヨ
レ！ やばいやばいやばいやばいー！ アンデッド最高♪ ね、逝
けメンでしょ、うちのダンナ？」

オレはプンやヤマモトクラスの変人はそうはいないと思っていた
が、世界は広いようだ。

『ふざけるなよ』(前書き)

あけましておめでとうございます。
今年もカオス・クロニクルをお願いします。

『ふざけるなよ』

ケルはべたべたと炎に包まれた屍にまわりつく。その様子にオレを含め全員ドン引きしていた。

「さあさあさあ！ おっ始めるわよ、ヤロウ共！ アタシのダンナのアシストよろしくう♪」

ケルはそう言って、ダンナ……フレイムゾンビをMOBの群れに突っ込ませた。

オレ達も遅れないようにそれに続く。プンがMOBにヘイトをして、近寄ってきたところを全員で叩く流れだ。要は昨日と同じである。

プンのヘイトで引き寄せられたマンイーターに、炎に包まれたダンナの右手が直撃する。炎の打撃エフェクトが激しく鳴動し、マンイーターは瞬く間に枯れ木となって大地に還った。どうやら、クリティカルヒットが出たらしい。

ケルはフレイムゾンビこと、ダンナの勇姿に見惚れていた。相当あのアンデッドに愛着があるようだ。サマナーを選択する人間というのは、変わり者が多いという噂を思い出す。

基本的にサマナーはソロ特化の職業だ。召喚獣専用の回復魔法と強化魔法をそなえ、自分の手足として扱う。召喚獣と一緒に狩りをする事でレベルが上がり、成長ポイントを好みのステータスに振り分けることが出来る。

フレイムゾンビは攻撃力特化のMOBなのだが、あの様子を見る限り、さらに攻撃力に成長ポイントを割り振っているのだろう。強化に強化を重ねたダンナの一撃は凄まじい。

それも、ヤマモトの出番がほとんどないくらいで2、3発のダンナの攻撃で次々とマンイーターの墓場ができあがっていく。

「ああああん。ダーリン。最高♪ ねえねえねえ！ 見てよあの炎に包まれた手！ あんな腕に激しく抱かれないと思わない！？ プンちゃん、エルトくん？！」

何でオレにまで振って来る……いい迷惑だ。

「けっこうです」

この人は相当変わり者だ。

「プン、冷え性だから暖かいの大歓迎です＊^^＊ ダンナちゃん
のツルツルした頭がなんだかカワイイですね、きやは〇(≡▽≡)
〇」

類は友を呼ぶんだな。

「……」

「どうした、ヤマモト？」

「ダンナさんハアハア……フレイムゾンビは生前麗しき乙女であったという公式設定が……」

ごうごうと炎を逆髪のように、ちよつとグロい頭部から噴出しているダンナが、生前麗しき乙女だと言われてもしっくりくるはずもない。しかし、ヤマモトはそこからさらに想像力をめぐらせ、その姿を脳内で補完したようだ。

こいつは、相手が女なら生きていようがアンデッドだろうが、どっちでもいいらしい。本当に何でもアリなのか。

ダンナが凄まじい勢いでMOBをひねり潰して進む。正直、オレとヤマモトはやることがなかった。

プンがMOBを引いて、それを一方的にダンナが倒すというもので、あまりにも単調すぎて拍子抜けする。だから、気を緩めてしまった。まさしくその『矢』先――。

「きゃあああああああああ！　だ、ダーリンがあああ！　くおらああああ、どこの誰じゃい！　ウチのダンナの頭に矢あ放ったんは！？」

凄まじいケルのシャウトがエリア一帯に響く。どうやら、ダンナが攻撃を受けたらしい。それもただのMOBではないようだ。

「あゝ　でもでもお。頭に矢が突き刺さったダンナもステキ……」

……いいのか。

しかし……ここは植物系のMOBが主体の狩り場だ。弓で攻撃してくるMOBはヒューマノイド系がほとんどで、このウェルド大森林には存在しない。

「エルくん、お肉屋さんだよー、ほらあれ^^」

お肉屋さん……プンが動き出した先、小さな川の向こう岸には三つの人影……肉屋がいた。ダンナを攻撃したのはあいつらしい。

「ここは私の狩り場。それ以上近づくな、PKする」

一方的な肉屋の発言。……冗談じゃない。一度ならず二度までも……昨日だってキレる寸前でなんとか押しとどめたのだ。一言文句を言ってやらねば気がすまない。

オレはエルトをみんなから一步前に出し、キーボードを素早く叩き込んだ。

「この狩り場は、昨日の炎の祭壇の倍はあるでしょう？　いくらあんたでも全部のMOBを狩りつくす事はできなはずだ。こっちが端っこで狩りをすれば、住み分けができるんじゃないですか？」

しばらく沈黙があった後。肉屋は再び口を開いた。

「駄目。MOBが足りない。お前達はよそで狩れ。ここは私が4時間前から使ってる。それでもここで狩りを続けるなら」

肉屋のセリフが終わると同時。エルトのHPゲージが赤く点滅した。

「PKする。お前達全員」

エルトのHPは二桁になってしまっていた。肉屋の放った矢が深々とエルトの胸に突き刺さっている。エルトは荒い息を吐いて今に

も倒れそうな状態だ。ディスプレイに映る肉屋の身勝手な振る舞いに、オレの中で熱いモノが煮えたぎった。

『ふざけるなよ』。それは、誰もいない暗い部屋で呟いたリアルの自分の言葉。ぬるくなつたコーヒーを飲み干し、キーボードに指を走らせる。

「エル君に何するの＞＜」

プンがオレの想像を裏切り、真っ先に肉屋に攻撃を仕掛ける為、動き出した。川を挟んで向かい合う形になっているわけだが、プンは川を越えるまでに無数の矢を体中に受け、まるでハリネズミのようになっていいる。普通なら即死レベルのダメージを受けているはずだが、持っていた回復薬類を全て使用してなんとか耐えているようだ。だが、もう持たないだろう。

「プン、やめろ！ お前が死ぬぞ！」

「大事な友達にこんな事されて、黙ってられないよ＞＜」

プンが川の中ほどで歩みを止めた。するとプンの体に光が集まり、それが全身を包み込んだ。そこに再び無数の矢がプンに襲い掛かる。だが、プンは倒れない。どうやら、防御力を極大化するスキル『ファイナルプロテクション』を使用したらしい。30秒間の間、自分の防御力に+3000されるそのスキルのおかげで、プンは力尽きることなく向こう岸にたどり着いた。

プンはすぐさま肉屋の一人、豚肉500gに斬りかかった。

プンの放った斬撃がエルフの女性を横一文字に切り裂き――牛肉

500gが倒れた。

「あれ@@?」

プンの攻撃はまぎれもなく豚肉500gを捉えていたのだが、直後に倒れたのは何故かその右の牛肉500gであった。

「肉屋YEEEEEE! そしてUZEEEEEE。正義の味方、みんなのアイドル。斬魔様参上! はい、拍手! www」

漆黒の塊が牛肉500gの後ろから現れる……それはPK斬魔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

カオス・クロニクル

2012年1月1日22時49分発行